本庄市埋蔵文化財調査報告　第24集

市内遺跡発掘調査報告書

―御堂坂第１号墳の調査―

平成14年

埼玉県本庄市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書

―御堂坂第１号墳の調査―

平成14年

埼玉県本庄市教育委員会

序　　文

埼玉県の北の玄関とも呼ばれる本庄市は、現在県北の中心都市としての飛躍を期待されていますが、本庄市のある児玉地域は、関東地方の北と南をつなぐ交通、文化の接点として古代より栄えてきた地域でもあります。埋蔵文化財のとりわけ多い地域であることが、それを何よりも雄弁に物語っています。

本庄市内だけでも、現在遺跡の数は187箇所を数え、古くから人々の暮らしに適した場所であったことがわかります。なかでも古墳時代については、旭・小島古墳群、東・西五十子古墳群をはじめとする多数の古墳が市域にあることから、かねてより注目を集めてきました。

しかし、かつてあった多くの古墳は、時々の開発行為により失われ、現在地上に古墳の形をとどめるものはほんのわずかです。今回発掘調査を行なった御堂坂第１号墳は、市内にのこされた数少ない墳丘のある古墳のひとつでした。

本報告書は、その調査結果をまとめたものです。本書の内容がしめすように、古墳とその中の埋葬や儀式のための諸施設について、あるいはすでに失われた隣接諸古墳との結びつきについて考えるうえで貴重な資料をえることができました。こうした細やかな資料がひとつひとつ集められ、またそれらがつなぎあわされることで、文字で書かれた資料にとぼしい時代の地域の歴史が少しずつ明らかになることと思います。この報告書が多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

最後になりますが、厳しい暑さの中での調査に、また報告書の作成にあたり多大なご協力を賜った方々に、心から御礼申し上げます。

平成14年３月15日

本庄市教育委員会
教育長　福　島　　巌

例　　言

1．本書は、埼玉県本庄市日の出３丁目５番3742－２に所在する御堂坂（みどうざか）第１号墳の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、埼玉県本庄市東台２丁目８番13　坂上富男氏の個人住宅建設に先だち、本庄市教育委員会が実施したものである。

3．発掘調査を実施した期間は、平成12年７月３日から同年８月30日までの約２か月である。

4．整理作業は、調査終了後漸次おこなったが、とくに平成13年５月21日から７月２日まで、同年10月29日から12月28日までの期間に、図版作成、原稿執筆、編集等の作業を集中しておこなった。

5．発掘調査および整理作業、報告書の作成にかかる組織は、下記のとおりである。

調査主体者

本庄市教育委員会

調査組織

本庄市教育委員会

教育長　福島　巌

事務局長　倉林　進

社会教育課

課　長　阿部　均（平成13年３月31日まで）

田中　靖夫（平成13年４月１日より）

課長補佐　福島　保雄（同和教育係係長兼務）

文化財保護係

係　長　増田　一裕

主　査　我妻　浩子

主　任　太田　博之

臨時職員　松本　完

臨時職員　町田奈緒子

6．発掘調査の担当者は、太田・松本である。

7．発掘調査に必要な基準点測量および水準測量に関しては、昭和株式会社に委託した。基準点測量にもちいた座標系は、第Ⅸ系座標系である。

8．本書の執筆は、「Ⅳ 遺構と遺物　2 出土遺物 (1) 古墳時代の遺物　c 埴輪」の項の記載を太田が、その他を松本がおこなった。なお、「Ⅲ 遺跡の立地と環境　2 周辺の遺跡と歴史的環境」の項でふれた御堂坂第２・４号墳については、増田・太田の調査所見にもとづいた。本書の編集は、松本がおこなった。

9．挿図中の第１図は１／25,000地形図『本庄』（1995年、国土地理院発行）、第２図は１／2,500地形図（1989年、パスコ測量）にもとづき加除筆したものである。

10．土層および遺物についての色調表現は、『新編標準土色帳』によった。

11．第３図の御堂坂第１～４号墳位置図で、　は確認もしくは調査をおこなった周堀の範囲をあらわしている。第６～８図の墳丘および周堀土層断面図で、　は礫を多量に含む層、　はロームを多量に含む層、　はシルト質の白みがかったロームをあらわし、表土層中に集積された礫以外は、いずれも石室構築材の一部である。また、第９図の奥壁平面図および立面図で、

▒▒▒ は棺床面下の礫をあらわしている。

12. 写真図版原版の作成は、増田が担当した。作成方法は、ネガフィルムを、スキャナーでパーソナルコンピューターにとりこみ、画像処理した後、インクジェットプリンターで打ち出したものを印刷にかけた。

13. 発掘調査および出土資料の整理、報告書作成にあたって、ご協力いただいた方々は、下記のとおりである。ここに記して、感謝の意をあらわす次第である。(敬称略、五十音順)

相田千代子、赤祖父瑞香、飯島嘉蔵、池田一彦、伊藤好雄、上田ニラモル、岡野敬、奥野節子、小野喬、金井一郎、金井栢郎、金本みどり、河田倫子、門倉澄子、神戸勝治、木島覚、木島麻子、木村タツ、久保田かづ子、古指茂、近藤美雪、斉藤真理子、塩原忠治、塩原晴幸、関根典子、高田和正、高橋辰馬、滝沢美知子、福島清治、八木道良、柳川恵美子、山崎和子、吉田真由美

飯塚龍太郎（専修大学）

目　次

序　　文 …… i
例　　言 …… iii
目　　次 …… v
挿図目次 …… vi
挿表目次 …… vi
図版目次 …… vi
Ⅰ　調査にいたる経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
　1　遺跡の立地 …… 2
　2　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 6
　1　調査の方法 …… 6
　2　調査の経過 …… 7
Ⅳ　遺構と遺物 …… 8
　1　遺構の調査 …… 8
　　(1)　古墳の位置と現状 …… 8
　　(2)　墳　　丘 …… 8
　　(3)　石室および前庭 …… 10
　　(4)　周　　堀 …… 19
　2　出土遺物 …… 19
　　(1)　古墳時代の遺物 …… 19
　　(2)　その他の遺物 …… 25
Ⅴ　ま と め …… 27
　　引用文献および主な参考文献 …… 28
図版

挿図目次

第１図　周辺の主要遺跡分布図……3
第２図　御堂坂第１号墳位置図……4
第３図　御堂坂第１～４号墳位置図……5
第４図　墳丘測量図……9
第５図　発掘調査範囲全体図……11
第６図　墳丘および周堀土層断面図(1)……12
第７図　墳丘および周堀土層断面図(2)……13
第８図　墳丘および周堀土層断面図(3)……14
第９図　石室および前庭平面図……15
第10図　奥壁平面図および立面図……16
第11図　前庭平面図および立面図……18
第12図　耳環実測図……20
第13図　土器実測図……20
第14図　円筒埴輪・朝顔形埴輪実測図……22
第15図　形象埴輪実測図……24
第16図　縄文土器実測図……25

挿表目次

第１表　埴輪観察表(1)……23
第２表　埴輪観察表(2)……24

図版目次

図版１　調査前近景（南西より）、表土下墳丘確認状況（南より）、墳丘残存状態（南西より）、石室確認状況（南西より）、耳環出土状態（南西より）、鉄製品出土状態（南より）
図版２　石室検出状態（南西より）、前庭検出状態（南西より）
図版３　玄室入口側および羨道（北東より）、玄室奥壁（南西より）、石室および墳丘精査状況(1)（南西より）、石室および墳丘精査状況(2)（南西より）
図版４　玄室奥壁遺存状態(1)（南西より）、玄室奥壁遺存状態(2)（北より）、北側墳丘および玄室土層断面（A－B）（北西より）、玄室奥壁根石遺存状態（北より）、玄室奥壁付近土層断面（A－B）（北西より）
図版５　東西土層断面（D－E）（南西より）、東西土層断面（H－I）（南西より）、東西土層断面西側（D－E）（南西より）、東西土層断面西側（F－G）（北東より）、調査範囲完掘状況（南より）
図版６　周堀確認状況（右からトレンチ１～３、北東より）、トレンチ１土層断面（J－K）（北西より）、トレンチ２土層断面（B－C）（北西より）、トレンチ３土層断面（L－M）（西より）、耳環、石室下旧表土出土土器

Ⅰ　調査にいたる経緯

本庄市は、埼玉県の北西部に所在する中核都市である。近世には中山道の宿場町として発展し、近代に至ると養蚕の町本庄として栄え、現在では拠点法の指定を受け、各種整備事業が計画されている。

一方、市内に所在する遺跡の数は187箇所に達しており、当然のことながら、各種開発行為に対する保存措置対策が大きな命題となっている。本庄市教育委員会では各種開発行為に対する保存措置の一環として、市内遺跡発掘等国庫補助金事業を実施している。

この事業は主として、保存計画立案のための試掘調査を中心に、毎年市内各所で実施しているが、やむを得ず、記録保存の措置を講じなければならない遺跡が多くなっているのは遺憾である。

本庄市日の出３丁目５番3742－２の一部の土地にかかる民家建設の予定が本庄市教育委員会に連絡されたのは、平成10年２月であった。当該地は御堂坂第１号墳（53―163）の残丘が観察され、現状保存が望ましい旨を、事業者である坂上富男氏に連絡したが、事業の都合と墳丘の遺存度が直径８ｍ程度で、周辺は宅地化が進行しており、現状保存が困難となった。

このため、平成12年５月15日付けで事業者である坂上富男氏より『埋蔵文化財の取扱いについて』の協議書を本庄市教育委員会に提出していただき、再度趣旨を説明し、現状保存をお願いしたが、事業実施の上で現状保存は困難であるとの見解に達し、遺構の性格も地下に包蔵されている埋蔵文化財ではなく古墳の残丘であり、なおかつ、遺存度も悪いことから、発掘調査を実施し、記録保存措置を講じることとなった。

発掘調査にかかる諸手続きは、以下のとおりである。

『埋蔵文化財発掘の届出』及び『埋蔵文化財発掘通知』を平成12年６月30日付けで本教社発第72・74号で本庄市教育委員会教育長より埼玉県教育委員会教育長宛に提出。

『周知の埋蔵文化財地における土木工事等について』の通知が平成12年７月27日付け教文第３-242号で埼玉県教育委員会教育長より本庄市教育委員会教育長宛に届く。

上記諸手続きをへて、現地発掘調査は約180㎡を対象に、平成12年７月３日から８月30日の期間内で実施した。また、平成13年度に整理作業を行なった。

なお、墳丘残丘部は記録保存としたが、周堀部分は範囲確認のトレンチを設定した結果、遺構確認面は、地表　下60㎝前後であったことから、現状保存の措置をとり全面発掘調査は実施していない。

（教育委員会事務局）

II　遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地

御堂坂第１号墳は、本庄市の中央やや東寄りの位置にある（第1・2図)。本庄市は、東西に長い埼玉県の北西端、北は利根川をへだて群馬県伊勢崎市と境を接し、地理的環境、気候、風土など群馬県南部と共通する点が多い。

南の上武山地から、妙義、浅間、榛名、赤城、男体、それらにつらなる山並、間近にのぞむ山々の美しさはとりわけ印象深いが、本庄市には山地とよびうる地形はみられない。市域の地形は、利根川右岸、市域北東縁にひろがる低地と市街地化の中心をなしてきた台地および南端の丘陵の３つにわけられる。

低地は、自然堤防や微高地の発達する利根川や烏川の氾濫原で、下流にひろがる妻沼低地、加須低地へとつらなる。台地は、いわゆる北武蔵台地の最北をしめる本庄台地で、主に神流川扇状地と身馴川扇状地からなる複合扇状地性の台地である。神流川扇状地は、群馬県鬼石町浄法寺付近を扇頂とし、扇端は上里町金久保から本庄市鵜森にかけて本庄段丘崖と呼ばれる段丘崖を形づくっている。段丘崖には、伏流水の湧出点がままみられ、また大小の谷地形が埋没谷の形で台地内にはうずもれており、扇状地性の台地特有の地形を織りなしている。身馴川扇状地は、北西側を第三系の残丘である大久保山(浅見山)、生野山といった児玉丘陵に、南東側を松久丘陵、櫛引台地により画され、身馴川、志戸川などが台地を細かくきざみ北東へと流れている。市域唯一の丘陵地形が、孤島のようにのこされた大久保山である。

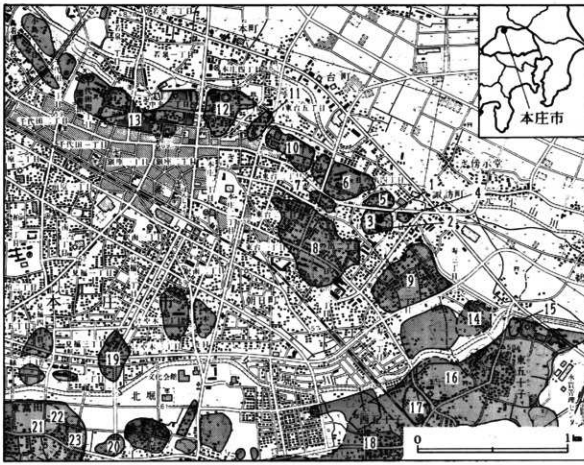
上記した地形の中で、御堂坂第１号墳は、本庄台地の南東縁の段丘崖から150ｍほどはなれたところに位置する。より細かくみるなら、御堂坂第１号墳の立地する段丘の南側一帯には、道満窪とよばれる大きな谷がひろがり、また、北西側にも崖線にほぼ直交する支谷がみとめられる。御堂坂第１号墳を含む御堂坂古墳群のある段丘は、北東側を本庄段丘崖に、北西、南東、南西側を支谷により開析された、菱形に近い形で半島状に突きでた段丘、あるいは島状にとりのこされた段丘とみることができる(増田　1990)。御堂坂第１号墳は、間近に大きな谷をのぞむ段丘の南西縁近くに立地する。

2　周辺の遺跡と歴史的環境

本庄台地の東半、とくに御堂坂第１号墳の周辺の遺跡にかぎって、ごく簡単にのべることにしたい。

本庄台地は、扇状地性の台地であるため、台地の形成以降も、表土の削剝、再堆積、大小の支谷の開析、埋没をくりかえしてきた経歴をもつようである。ひとつにはこの特徴ゆえに、遺跡の時期、分布にきわだった傾向がみとめられる。

調査例の少ない旧石器時代の遺跡はひとまずおき、縄文時代以降の遺跡について、まず



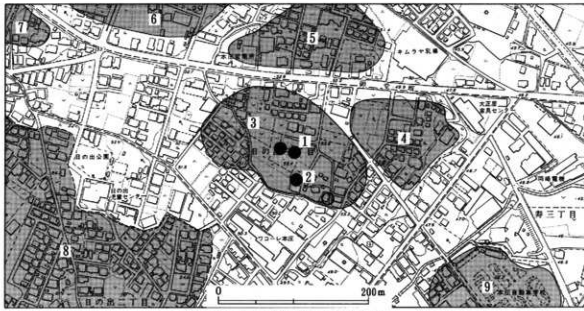
1．御堂坂第1号墳　2．御堂坂第2号墳　3．御堂坂古墳群　4．本庄23号遺跡　5．御堂坂遺跡　6．薬師堂東遺跡　7．薬師堂遺跡　8．塚合古墳群　9．諏訪新田遺跡　10．天神林II遺跡　11．天神林遺跡　12．本庄城址遺跡　13．北原古墳群　14．鵜森古墳群　15．赤坂埴輪窯址　16．東五十子古墳群　17．五十子陣跡　18．西五十子古墳群　19．笠ヶ谷戸遺跡　20．久下東遺跡　21．公卿塚古墳　22．久下塚古墳群　23．東富田遺跡群

第1図　周辺の主要遺跡分布図

本庄台地では、本庄段丘崖の周辺、すなわち扇端一帯には、縄文～弥生時代の遺跡がきわめて少なく、遺構も現状では皆無に等しい。

弥生時代に関して、その傾向はとくに顕著であり、御堂坂第1号墳の北西近隣の薬師堂遺跡（第1・2図7：以下文中の（　）内の番号は、第1・2図の番号と同じ）で出土したとされる弥生時代後期の土器（二軒屋式）は、稀少例のひとつである（本庄市史編集室編　1976）。なお、御堂坂第2号墳の調査、および今回の調査でも、縄文時代後期の土器片がわずかながらも検出されており、また谷をへだてた南側の諏訪新田遺跡（9）では、周辺では唯一の完形に近い縄文時代後期の深鉢が河道の改修時に出土している。縄文時代後期という共通点が問題になるところであるが、今回の調査でも墳丘下に縄文時代に相当する堆積土がわずかにのこっており、本庄段丘崖周辺に縄文～弥生時代の遺跡が少ないということにも、細かな地形の機微に応じた違いがみられるようである。

上記した傾向は、古墳時代前期の終りごろ、あるいは古墳時代中期以降大きく変化する。



第２図　御堂坂第１号墳位置図

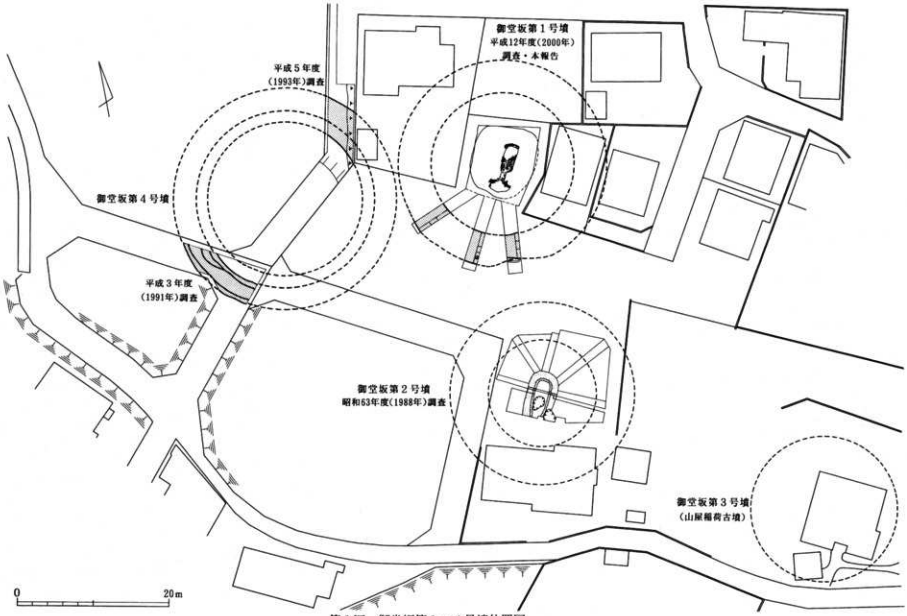
本庄段丘崖の周辺に、集落、および墓（方形周溝墓あるいは古墳）がみられるようになるのは、早くとも古墳時代前期の終りごろ以降である。

御堂坂第１号墳の周辺についてみてみよう[1]。周辺の集落址としては、まず、御堂坂第１号墳のある段丘上では、東側に本庄23号遺跡（4）、北側に御堂坂遺跡（5）がある。支谷をはさんだ北西側には、薬師堂東遺跡（6）、薬師堂遺跡（7）があり、また、御堂坂第１号墳の南西～東側にある大きな谷をへだてた南側の段丘上には、古墳時代以降の大規模な集落址である諏訪新田遺跡（9）がある。時期的には、本庄23号遺跡、御堂坂遺跡が古墳時代後期、薬師堂東遺跡、薬師堂遺跡、諏訪新田遺跡が古墳時代中期以降となる。さらに西側には、天神林Ⅱ遺跡（10）、天神林遺跡（11）、本庄城址遺跡（12）があり、図示した範囲の西側約500ｍくらいまで、各時期の集落が所々とぎれながらも、本庄段丘崖に寄りそうように展開する様をしめす。この崖線縁辺の集落分布の帯は、さらに西側へとのびている。

周辺の古墳群としては、本報告の御堂坂第１号墳、第２号墳（増田　1990）、第３号墳（未調査で湮滅）、第４号墳[2]を擁する御堂坂古墳群（第２・３図）、より大規模な古墳群を形成する塚合古墳群（8）（菅谷ほか　1969）、西側やや離れて北原古墳群（13）がある。御堂坂古墳群に関しては、塚合古墳群の支群とみる見方もありえようが、孤立するかにみえる立地からは、また別の見方もできそうである。

塚合古墳群の場合、総じて７世紀代の終末期の円墳が主となるようであるが、古墳群の南東部、本庄東小学校と本庄東高校の間には、二子山古墳と呼称される前方後円墳がかつてあったとされている。また、本庄東小学校の敷地内では、いわゆるＢ種ヨコハケのみられる円筒埴輪片が採集されており（佐藤　1988）、単に終末期の古墳群としてのみはあつかいきれないことがわかっている。

第１図の下方には、本庄段丘崖の南東縁および現在の女堀川に隣接する諸遺跡を参考までにあげておいた。そうした一帯にも、鵜森古墳群（14）、東五十子古墳群（16）、西五十子



第３図　御堂坂第１～４号墳位置図

古墳群（18）や、公卿塚古墳（21）とその周囲の古墳群（22）、および集落址（19・20・23）が、所々まとまりながらも、複雑にからみあう形で遺跡の密集域をなしている。現在の地形からはやや不規則な分布ともみえるが、河道の変転を典型とする地形変化に則したそれぞれの居住域や墓域の変化の集積が、結果として今ある遺跡分布となったがゆえである。古墳群と集落の関係については今後の研究にまつほかないが、それには扇状地性台地特有の複雑な地形環境の復元、集落址と古墳群の推移の細部をあきらかにし、分布にみられる特色をさらにみきわめる必要があるであろう。

註

(1) 以下、とくに明記しない場合には、『本庄市史』（本庄市史編集室編　1976・1986）、御堂坂第２号墳の報告書（増田　1990）による。なお、第１・２図は遺跡分布の概略図であり、諏訪新田遺跡などのように、細かく地点のわかれる遺跡をひとまとめにしており、また古墳群に関してはおおよその範囲をしめすにとどまる。

(2) 御堂坂第４号墳については、1991年、1993年の２次にわたり、道路部分のみではあるが、本庄市教育委員会が発掘調査および試掘調査をおこなっている。1993年の試掘調査では、墳丘は遺存していなかったものの、石室の基礎面を確認しており、第４号墳にともなう可能性のある埴輪片が周堀から出土している。確認しえた周堀からは、墳丘径20.05～23.6m、全径29.5mの円墳と推定される（御堂坂古墳群第２地点試掘調査　調査担当：太田博之）。

Ⅲ　調査の方法と経過

1　調査の方法

御堂坂第１号墳の調査は、大きくわけて墳丘および石室の発掘調査と併行しておこなった周堀の確認のためのトレンチによる調査にわけられる。ここでは、主に墳丘および石室の調査の方法について概略をしるすことにしたい（第４・５図）。

当初、墳丘の残存状態から判断して、墳丘が旧状をとどめていない可能性があったため、まず見掛け上の墳丘の中心点を仮にさだめ、それを起点として十字にセクションベルトをのこし、墳丘の表土剝ぎをおこなった。表土剝ぎの後、おおよそ墳丘の形状が判明した時点で、石室および前庭と思われる範囲を見さだめ、新たにトレンチおよびセクションベルトを設定しなおし、またこの時点で等高線図を作成した。以上の作業は、墳頂部にもうけた仮の規準点にもとづきおこなった。石室の埋積土をある程度のぞいてからは、業者に委託し、座標計算された規準杭を設定し、それにもとづき作業をすすめた。

遺構覆土に関しては、遺物の三次元的な記録を原則とする方針でのぞんだが、石室内は盗掘によりいちじるしくそこなわれており、遺物もきわめて僅少であったため、耳環などごく一部の遺物以外は、セクションベルトによりわかたれた区画ごとに可能な範囲で層位をしるし、とりあげた。

遺構の実測図作成には、1／10、1／20、1／40の縮尺を適宜もちいた。棺床面の舗石に関しては、50×50cmのメッシュをかけて撮影した写真より平面図を起こした。

棺床面直上10cmほどの覆土については、全面に50×50cmのメッシュをかけて区画とし、各区画ごとに覆土を採取した。実際には、棺床面が確定しきれない段階にも同様の方法で覆土を採取しており、それらについても同様にあつかった。現地において、骨片や玉類の回収を目的とする最小 2.5mm目のフルイによる選別作業をおこなったが、棺床面直上層の試料からは、その種の微細遺物は一切検出できなかった。後述する小型の耳環は、棺床面直上層より上の層のフルイかけにより検出した。

2　調査の経過

平成12年7月3日、調査員、作業員一同現地に集合し、器材の搬入、防護柵やテントの設営などから作業をはじめた。翌7月4日から墳丘表土の除去に着手し、7月12日ごろまでには、盗掘坑に破壊された範囲を含む石室、前庭の輪郭がおおむねとらえられた。この時点で一旦墳丘残存状態の写真撮影および等高線図の作成をおこなった。

7月17日からは、石室埋積土をとりのぞき、残存する壁や棺床をさぐる作業をはじめたが、崩落した裏込めと思われる大小礫の不規則な集中、そもそも崩落土と攪乱土とが混然として識別しにくいなど、作業はかなり難航したが、7月24日には、棺床面の一部を確認しえた。7月28日には、あらためて基準杭の設定を委託・実施し、以降棺床面の検出・精査、羨道、前庭の精査にはいり、ほぼ全体が露出した7月31日に石室の残存状態の写真撮影をおこなった。

8月1日以降、墳丘の断ち割り、土層断面図の作成、写真撮影をつづけ、また奥壁の石組みの精査をおこなうとともに、8月23日以降は、並行して墳丘南側に3本のトレンチを順次設定し、周溝の確認作業をおこなった。8月25日からは、墳丘下旧表土の黒褐色土を掘りさげて軟質のローム層上面まで精査した。8月29日に遺跡全景の最終的な撮影をおこない、8月30日には、トレンチを埋めもどすとともに、器材を撤収し、調査を終了した。

途中炎暑がつづき、また台風が通過したり、雷雨にみまわれるような事態もあったが、全体としては好天にめぐまれた。実働日数は、36日である。

Ⅳ　遺構と遺物

1　遺構の調査

(1)　古墳の位置と現状

御堂坂第１号墳は、御堂坂古墳群では、墳丘ののこる最後の古墳であった。現在確認できる御堂坂古墳群の４基の古墳の中で、最も北にあり、南側の段丘崖から40ｍほどはなれた位置にある。痕跡のみの古墳をも含め５基の古墳があったとする記録があるが（本庄市教育委員会　1957)、現在確かめられる古墳は４基以外にはない。

調査前には、南側には畑地、北側には荒蕪地がひろがり、西・東側は宅地が残丘の間近にまでせまる状態であり、調査地も篠竹や雑草の生いしげる荒蕪地であった。墳丘は、四周をけずられているためか隅丸長方形に近く、最大径は南北方向で10.4ｍ、現存高は1.5ｍ前後であった。墳頂と目されるあたりは、ゆるやかにくぼんでおり、調査前より盗掘などの破壊をこうむっていることが予想された（第３・４図)。

(2)　墳　　丘

ａ．残存状態

墳丘を四分割し表土をとりのぞくことから着手したが、墳丘表土層には篠竹が繁茂し、その根は部分的に墳丘盛土にまで深くおよんでいた。また、表土層には、土器・陶磁器片、埴輪片、瓦片など種々雑多な遺物や大小の礫がかなり含まれていた。

第４図は、表土層除去後の等高線図である。実際墳丘には、表面的な調査のみでは見わけきれない攪乱が所々にあり、図示した等高線には、墳丘本体を正確にしめしていない部分も多少あるが、残存する墳丘のおおよその外形は推定できるであろう。

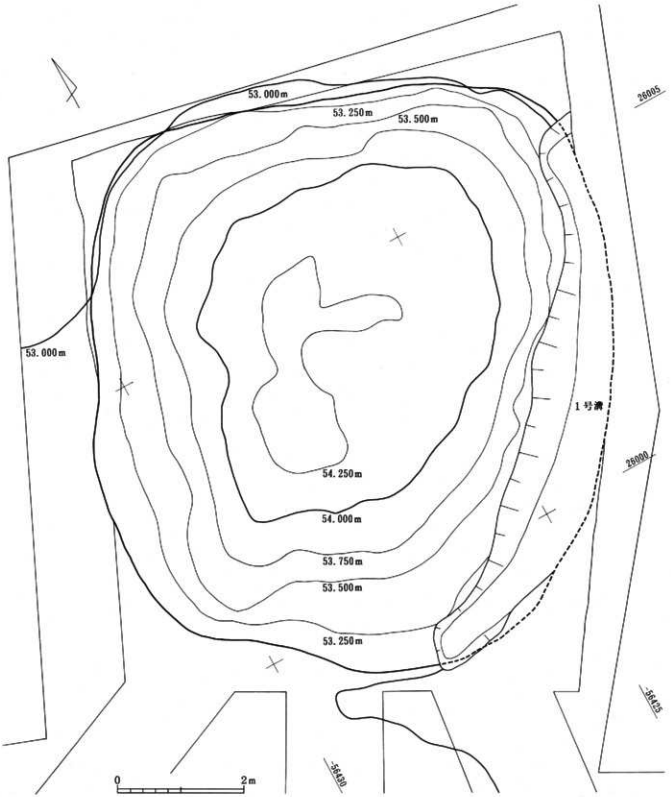
調査範囲内では溝状に近いため１号溝と称した近世以降の遺構により、墳丘東側は大きくこわされている。なお、西側墳丘下で、風倒木痕と思われる円形にひろがるロームの逆転層を確認したが、精査していない（第４・５図)。

ｂ．形態と規模

表土除去後の墳丘の形態も大きく変わることなく、平面形はおおむね隅丸長方形で、側面からみると椀を伏せたような形状である。盗掘による破壊だけでなくそれ以降も改変をうけているらしく、墳頂部付近には、不整な凹凸がみとめられる。全体として耕作や土取りによる破壊が、土地の区画にそって四方から進行したことをしめしている。残存する墳丘本体の大きさは、南北で8.9ｍ、東西では推定で８ｍ前後、高さは1.1～1.2ｍである。

ｃ．盛土の状態

今回の調査では墳丘の残存状態もあり、土層観察用の壁面は、図示していない裏面を除いて、石室の主軸方向１面とそれを横断する３面を検討材料とした(第６～８図)。奥壁側は、石室周辺以外ほとんどのこっておらず、墳丘盛土の状態がわかるのは東西方向に横断する断面である。石室断面と関連する点については後述する。


53.000m
53.250m
53.500m
53.000m
54.250m
54.000m
53.750m
53.500m
53.250m
1号溝
26005
26000
-36425
-36420
0
2m

第4図　墳丘測量図

まず、墳丘の盛土は、黒褐色土を主とする層とロームを主とする層の、大きくわけて2つの層にわけられる。墳丘は、基本的にこの2種の土層が交互に盛りあげられることで造作されている。ただし、この2種の土層が細かな互層をなすわけではなく、裏込めの砂礫層の充塡につづいてロームを主とする土で石室周辺が固められ、さらに黒褐色土を主とする一連の土が盛られ、順次墳丘が築かれている。

それぞれの壁面の土層の対応関係についてとくに留意したが、実際異同を判定しきれない土層が多数あり、また、玄室（土層断面A－B）と羨道（土層断面F－G、H－I）で、土層がかなり異なるかにみえる。

なお、トレンチ2（土層断面B－C）、トレンチ1（土層断面J－K）では、周堀の端の墳裾にあたる部分がわずかながらも平場をなすかにみえる(第7図)。周堀をおおう8層は、古墳時代旧表土の黒褐色土を多く含んでおり、墳裾から周堀にかけて明らかに削平されてはいるものの、8層の堆積時点でもとの地形がいくらかでものこされていたとすれば、テラスがあった可能性があると考えられる。

(3) 石室および前庭

a．石室の残存状態

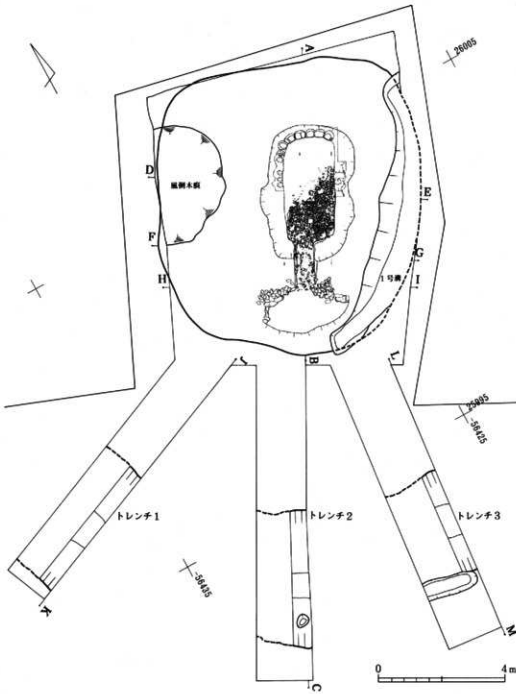
石室は、残存する墳丘の中軸線よりわずかに東寄りの位置にある。玄室と羨道からなる両袖型の横穴式石室で、前庭の一部が遺存している（第5・9図)。石室内は、奥壁や棺床面の一部をのぞいて、いちじるしく攪乱されていた。奥壁以外の玄室壁材が根石にいたるまでことごとく抜きとられており、盗掘というより古墳の破壊とよぶほかないあり様であった。石室の埋積土のなかには、多量の礫が含まれていたが、壁材と思われる浮石質の角閃石安山岩は砕片や削片、いわゆるバラス以外ほとんどみられない。壁材はもちさられており、また奥壁側の棺床面の舗石もうしなわれている。

b．石室の形態と規模

玄室の平面形は、隅丸長方形に近いが、奥壁はあきらかに丸みをもち、微妙に胴が張るようである。羨道は、やや問題がのこるが玄室中軸線に対し西にかたよった位置にあり、袖壁の大きさは左右で大きく異なっている。

石室全長は4.87m、玄室長は3.37m、玄室の最大幅は1.68mである。玄室はS－29°－Wの方向に開口している。羨道長は1.5m前後、羨道幅は現存で0.55～0.6mである。

石室内には、壁材や裏込めの一部と思われる大小の礫を多量に含む暗褐色土が流入していた。4～6層の3層に一応わけたが、石室内の埋積土は、開口した墳頂からの流入土と墳丘や壁材の崩落土とが渾然としており、とくに玄門から羨道にかけての埋積土に関しては、どこまでが攪乱なのか判断にまよう場合もあった。なお、土自体はまぎれもなく攪乱に類するものであるが、5・6層の上面は硬くしまっていた。また、西側壁のほぼ中央、東側壁の手前隅では、拳大か、それよりやや大きい円礫が壁面にそうように集中する箇所がみられた。側壁の一部とも考えたが、礫間に空隙が目立ち、石組みをなすようにはみえなかったため、崩落しずりおちた側壁の一部もしくは裏込めと判断し、図化しなかった。

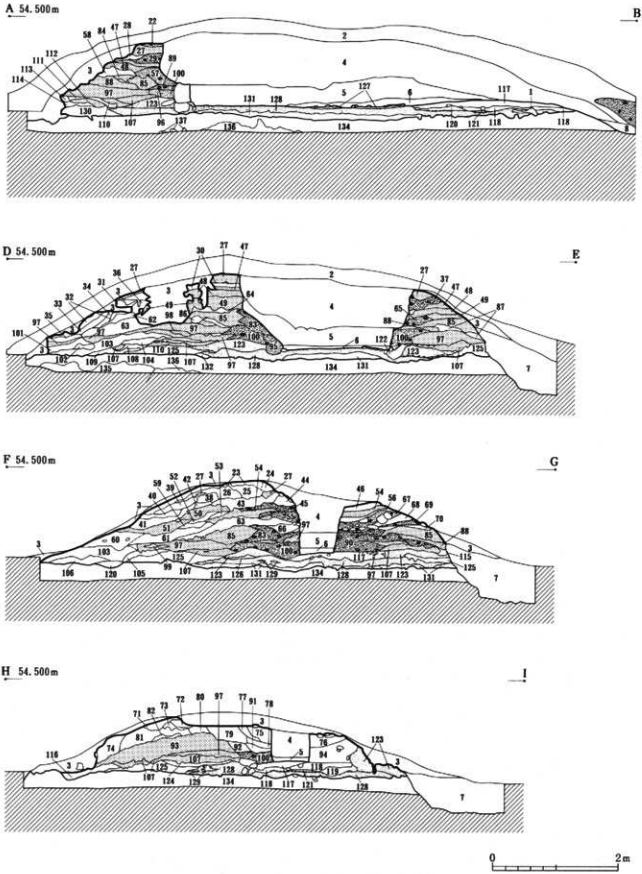


第5図　発掘調査範囲全体図

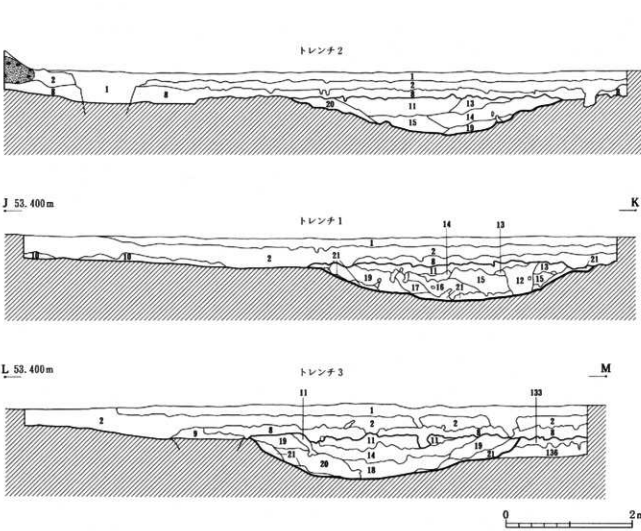
c．石室構築材の状態と諸特徴

石室と前庭の構築材の状態について、土層断面図(第6～8図)をもとにしるし、あわせて最ものこりのよい奥壁、前庭についてややくわしくしるすことにしたい（第9～11図)。

墳丘直下には、層厚14～30cmで旧表土の黒褐色土、134層が堆積していた。石室範囲内の134層上面には細かな凹凸がみられ、微妙に掘りくぼめられており、墳丘構築に先だち何らかの作業がおこなわれたと推定される。また土層断面D－Eでは、角閃石安山岩の細かな



第6図　墳丘および周堀土層断面図(1)



1層：暗褐色～灰黄褐色土。現耕作土。
2層：褐色土。粒子の粗い旧耕作土、あるいは近世以降の表土。
3層：暗褐色土。2層に近いが、黒褐色土、ロームを含む。
4層：暗褐色土。盗掘坑覆土。3層を主に、大小礫多量に含む。
5層：暗褐色土。盗掘坑覆土。4層よりしまっている。
6層：暗褐色土。5層に近いが、ロームが多く、さらにしまる。
7層：暗褐色～褐色土。1号溝覆土。
8層：暗褐色土。2層に近いが、黒褐色土が多く、粒子が細かい。
9層：暗褐色土。土坑覆土の可能性がある。
10層：暗褐色土。黒褐色土とロームの混合土。
11層：暗褐色土。暗褐色土を主に、黒褐色土、ロームを含む。
12層：暗褐色土。土坑覆土。11層よりロームが多い。
13層：黒褐色土。粒子の粗い黒褐色土。11層に比し、黒み強い。
14層：暗褐色土。11層に近いが、白みがかったロームが混入する。
15層：暗褐色土。14層に近いが、白みがかったロームが多い。
16層：暗褐色土。15層に近いが、ローム粒が明瞭。
17層：暗褐色土。15層に近いが、ロームが均等に混入する。
18層：暗褐色土。15層に近いが、ロームの斑らが不明瞭。
19層：暗褐色土。15層に近いが、ロームブロックが多い。
20層：暗褐色土。18層に近いが、黒みが強い。
21層：暗褐色土。20層に近いが、ロームが多く、斑状に混入する。
22層：小礫を多量に含む層。黒褐色土とロームの混合土を含む。
23層：暗褐色土。3層に近いが、ローム粒が多い。
24層：暗褐色土。23層に近いが、ローム粒がやや多い。
25層：暗褐色土。23層に近いが、ロームブロックを含む。
26層：暗褐色土。23層に近いが、ローム小ブロックを含む。
27層：黄褐色土。ロームを主に、黒褐色土を少量含む。
28層：暗褐色土。黒褐色土とローム斑状に混合。
29層：小礫を多量に含む層。下部は、28層に近く、堅くしまる。
30層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ローム小ブロックを少量含む。
31層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ロームを斑状に含む。
32層：暗褐色土。暗褐色土・ロームを主に、黒褐色土を含む。
33層：暗褐色土。32層に近いが、ロームが多い。
34層：暗褐色土。33層に近いが、黒褐色土若干多い。
35層：黒褐色土。33層に近いが、黒褐色土が多い。
36層：暗褐色土。32層に近いが、ロームが多い。
37層：大小礫を多量に含む層。側壁付近に、拳大の礫集中。
38層：黒褐色土。黒褐色土とロームの斑状の混合土。
39層：暗褐色土。38層に近いが、黒み弱く、しまりがない。
40層：黄褐色土。ロームを主とし、黒褐色土を斑状に含む。
41層：黒褐色土。黒褐色土と暗褐色土の混合土。しまっている。
42層：黒褐色土。暗褐色土を主とし、ローム・ロームブロックを含む。
43層：暗褐色土。42層に近いが、ロームが少なく、ブロック小さい。
44層：黒褐色土。黒褐色土とローム混合土。小礫を含む。
45層：暗褐色土。43層に近いが、小礫をかなり含む。
46層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ロームを少量含む。

第7図　墳丘および周堀土層断面図(2)

47層：黄褐色土。ロームを主に、黒褐色土を少量含む。
48層：黄褐色土。47層に近いが、黒褐色土が少ない。
49層：褐色土。ロームを主に、黒褐色土を均質に含み、小礫を含む。
50層：褐色土。黒褐色土とロームが斑状、層状をなし混在。
51層：褐色土。50層に近いが、ロームブロックが大きく白みがかる。
52層：黒褐色土。黒褐色土、暗褐色土、ロームが均質に混合。
53層：黒褐色土。52層に近いが、黒褐色土が多く、黒みが強い。
54層：褐色土。50層に近いが、上半に小礫を含む。
55層：小礫を多量に含む層。黒褐色土を含む。
56層：褐色土。54層に近いが、黒褐色土が多い。
57層：大小礫を多量に含む層。
58層：黒褐色土。黒褐色土を主とし、ロームを多量に含む。
59層：褐色土。54層に近いが、黒褐色土の小ブロックを含む。
60層：黒褐色土。黒褐色土を主に、大小ロームブロックを含む。
61層：暗褐色土。59層に近いが、黒褐色土のブロックがより大きい。
62層：暗褐色土。33層に近いが、ロームが多い。
63層：暗褐色土。暗褐色土とロームが斑状、所々ブロック状に混合。
64層：黒褐色土。黒褐色土を主に、部分的にロームを含む。
65層：大小礫を多量に含む層。鋼壁付近に大きめの礫集中。
66層：暗褐色土。63層に近いが、小礫を含む。
67層：大小礫を多量に含む層。拳大以上の大礫集中。
68層：黄褐色土。ロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。
69層：小礫を多量に含む層。黒褐色土を含む。
70層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ロームを少量含む。
71層：暗褐色土。黒褐色土、暗褐色土、ロームの斑状混合土。
72層：黒褐色土。黒褐色土を主に、暗褐色土、ロームを含む。
73層：黒褐色土。72層に近いが、ロームブロックが多い。
74層：暗褐色土。71層に近いが、ロームブロックが明瞭。
75層：暗褐色土。黒褐色土とロームの混合土。小礫を含む。
76層：暗褐色土。75層に近いが、拳大以上の礫を含む。
77層：暗褐色土。75層に近いが、黒褐色土が多い。
78層：暗褐色土。75層に近いが、黒褐色土、ロームの混合が均質。
79層：暗褐色土。78層に近いが、小礫が少ない。
80層：暗褐色土。黒褐色土、暗褐色土とロームの均質な混合土。
81層：暗褐色土。80層に近いが、混合土が不明瞭ながら層状をなす。
82層：暗褐色土。81層に近いが、ローム多く、混合土が不明瞭。
83層：大小礫を多く含む層。黒褐色土、ロームを所々含む。
84層：黄褐色土。ロームを主に、黒褐色土を含む。
85層：黄褐色土。ローム大ブロック間に、黒褐色土が混入する。
86層：暗褐色土。黒褐色土とロームの不均質な混合土。
87層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ロームを含む。
88層：黄褐色土。85層に近いが、黒褐色土が多く、ブロックが小さい。
89層：小礫を多量に含む層。小礫間にはロームが混入する。
90層：大小礫を多量に含む層。2、3層分層可能か。
91層：暗褐色土。78層に近いが、黒褐色土が多く、礫が大きい。
92層：黒褐色土。黒褐色土を主に、下部に小砕石を少量含む。
93層：黒褐色土。黒褐色土とロームが不明瞭ながら層状をなす。
94層：暗褐色土。暗褐色土とロームを主に、拳大の礫を含む。
95層：小礫を多量に含む層。83・100層との境は明瞭ではない。根石抜取跡理土。
96層：黄褐色土。ローム大ブロック間には黒褐色土が混入する。
97層：黄褐色土。ロームを主に、上部に小砕石を少量含む。
98層：黄褐色土。97層に近いが、ロームが若干白みを帯びる。
99層：暗褐色土。暗褐色土とロームの混合土。
100層：暗褐色土。91層に近いが、ロームが多く、下部に小砕石を含む。
101層：黒褐色土。暗褐色土を主に、黒褐色土、ロームをかなり含む。
102層：暗褐色土。101層に近いが、ロームが少ない。
103層：暗褐色土。暗褐色土を主に、黒褐色土、ロームを含む。
104層：黒褐色土。黒褐色土を主に、暗褐色土、ロームを含む。
105層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ロームを少量含む。
106層：暗褐色土。103層に近いが、黒褐色土が若干多い。
107層：黄褐色土。ロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。
108層：暗褐色土。暗褐色土を主に、黒褐色土を斑状に含む。
109層：暗褐色土。暗褐色土を主に、黒褐色土、ロームを斑状に含む。
110層：黄褐色土。107層に近いが、黒褐色土が多い。
111層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ロームを斑状に含む。
112層：黄褐色土。ロームを主に、黒褐色土を斑状に含む。
113層：黄褐色土。122層に近いが、暗褐色土を含む。
114層：黒褐色土。111層に近いが、ロームブロックが少ない。
115層：黒褐色土。黒褐色土を主に、暗褐色土を含む。小砕石を含む。
116層：黄褐色土。107層に近いが、黒褐色土が若干多い。
117層：暗褐色土。黒褐色土とロームの混合土。小礫、小砕石を含む。
118層：暗褐色土。117層に近いが、小砕石が上・下部で薄層をなす。
119層：暗褐色土。暗褐色土、ロームを主に、小礫を所々含む。
120層：黄褐色土。細かく砕け層をなす小砕石に少量のロームが混入。
121層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ローム、砕石の微細片を含む。
122層：黄褐色土。白みの強いローム・黒褐色土の大ブロックを主とし、小礫を含む根石抜取跡埋土。
123層：にぶい黄褐色土。シルト質に近い白みの強いローム。
124層：黒褐色土。黒褐色土を主に、ロームを斑状に含む。
125層：黒褐色土。純層に近い黒褐色土。極微量のロームを含む。
126層：黒褐色土。黒褐色土と123層土の混合土。
127層：黄褐色土。120層に近いが、よりしまっている。
128層：にぶい黄褐色土。123層に近いが、所々黒褐色土が多い。上面に黒褐色土の薄層がみられ、砕石の微細片を点々と含む。
129層：黒褐色土。黒褐色土と123層土が斑状に混合する。
130層：黒褐色土。黒褐色土と123層土、ロームが斑状に混合する。
131層：黒褐色土。純層に近い黒褐色土。所々鉄分が沈着し、砕石の微細片を点々と含む。
132層：黒褐色土。純層に近い黒褐色土のブロック。
133層：暗褐色土。暗褐色土とロームが斑状に混在する埋目の層。
134層：黒褐色土。古墳時代表土の黒褐色土。局所的に小砕石混入。
135層：暗褐色土。暗褐色土とロームの混合土からなる風倒木痕埋土。
136層：暗褐色土。ローム層直上の自然堆積の暗褐色土。

第８図　墳丘および周堀土層断面図(3)

砕片が134層中に不規則に点々と含まれていた。明確に分層できず線引きしていないが、黒褐色土以外の土が混ざらないやり方で、134層自体にも一部手が加わっている可能性がある。

131層上面はほぼ玄室とかさなる範囲が平らにならされている。土層断面D－Eでは、玄室予定範囲の周囲の黒褐色土をあつめて玄室部分を高くもりあげたかのようにみえる。131層は、玄門付近では凹凸をもってひろがり、羨道ではみられない。

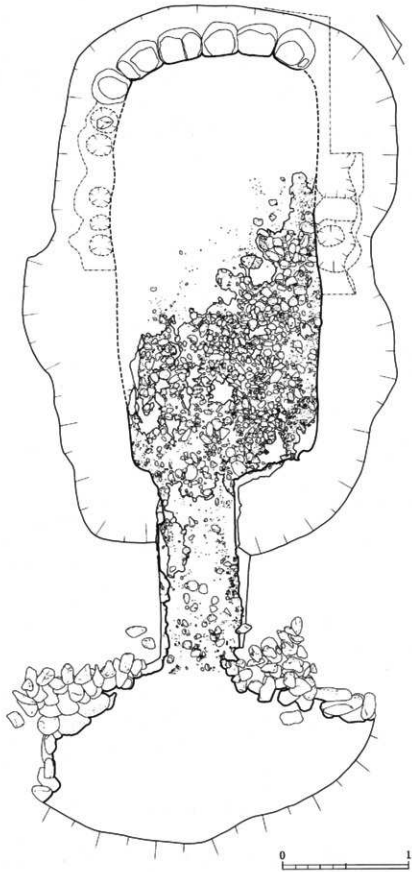
つづいて白みがつよくシルト質に近いロームである128層が、石室よりひとまわりほどひろい範囲に敷きつめられる。128層上面は、玄室部分ではやや高く平らにならされ、羨道部分では、上面に凹凸がみられるとともに、黒褐色土や礫が混入し均質ではない。

次に壁の根石が配され、棺床面に、127層としたロームが所々薄く張られるとともに、拳大もしくはそれ以下の平たい亞円礫や角閃石安山岩の砕片が敷かれ棺床面がつくられた模様である。棺床面はほぼ平坦で叩きしめられたように硬化している。硬化範囲は壁の範囲

よりせまく、壁際は軟質で舗石もまばらである。旧表土の134層上面から棺床面までの高さは、30cm前後、盗掘坑開口部から棺床面までの深さは、石室中央で100cm前後である。

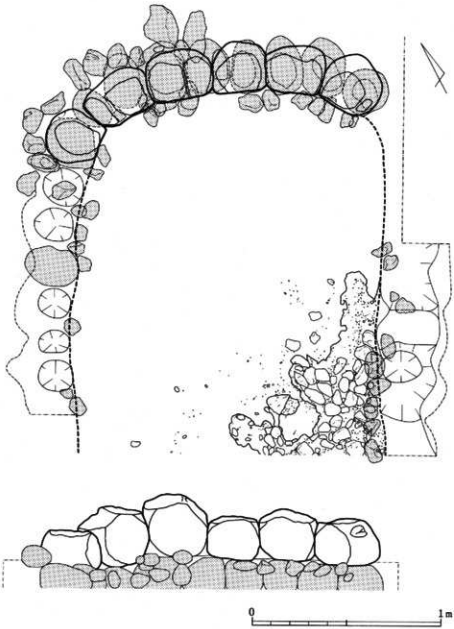
奥壁の根石は10個のこっていた。それらを参考にすれば(第10図)、根石として上面にあたる部分のみ平たく加工した人頭大の角閃石安山岩が、128層に埋めこむように上面と前面をそろえ配されており、それに大ぶりの砕石や亞円礫、角礫をあてがい固定している。根石の跡であるくぼみを確認したのは玄室北半のみであるが、根石にそえた礫の跡もくぼみとしてのこっており、128層がある程度粘性のある状態で根石などが設置された可能性が考えられる。

つぎに壁最下部の角閃石安山岩が根石の上に互目積みされる。奥壁には、前面、上下面、左右側面を加工された人頭大もしくはそれよりやや大きめの角閃石安山岩が6個のこっていた。丸みのある河原



第9図　石室および前庭平面図

の転石を利用したものであろう。平らに整形された前面、下面には、鑿状の工具で帯状にはつった並行する加工痕がとくに顕著である。上面には、2つの石にまたがり上石が安定するように2方向斜めに打割したり、えぐるような加工がほどこされ、下面の接合面は平らにけずられている。側面の加工は概して粗く、片面のみの加工例もある。前面や下面以外は、ほとんどが局所的な加工で全体に原礫面がかなりのこっている。



第10図　奥壁平面図および立面図

原礫の形状に即した接合面の巧みではあるが最小限の加工をみるかぎり、その場で打割と削剝により石材を加工しては組みあげ、また配置を見込んで最終的な加工をくわえるという、加工しやすい石材特有の工程が推定される。

さらに白みのつよいロームである123層が盛られ、最下部の石組みが外側からかためられる。123層と128層とは、白みのつよいシルト質のロームという点で共通するが、125・126層とした間層をはさむ箇所があり、工程としては断続している。123層はほぼ同じような高さで玄室をとり巻くように盛られているが、羨道部分ではかなり凸凹している。

以後の墳丘および石室の細かな構築状況を復元することは容易ではないが、土層断面図からは、裏込めの大小礫層、およびロームを主とする層、墳丘の盛土という3種の土層のまとまりが識別できる。それらは各段の石列の外側に大小礫層が裏込めとしてつめられ、その外側にロームを主とする土が盛られ、ひきつづいて墳丘が盛りあげられる、というひ

とつながりの工程がくりかえされたことをしめしている。下から112・110・107層、98・97層、88・85・84層、54・51～47層、27層という都合５つのロームを主とする土層のまとまりがあることから、現存する墳丘および石室が、そのひとつながりの工程を５、６回くりかえしてつくられていることがわかる。

最下段の礫は高さが23～33cmあり、残存する壁の高さは100cmほどであるから、３、４段の石列が現開口部までにあったと推定できる。上に想定した工程数とあわないのは、最下段の石列にくらべ上段の石列の礫が小さいか、ロームを主とする土層の単位を細かくわけたため石組みと対応しない部分が生じたのか、どちらかであろう。

67層とした拳大の礫を多く含む層があり、石室埋積土からやや大き目の礫がかなりの量出土していることからすれば、裏込めは小礫を主とするもののみではないようである。控積みの痕跡はみられないが、裏込めとして拳大からそれより大きな礫を多くもちいた箇所もあったことが推定できる。裏込めの礫がくずれている部分については、本来の裏込めなのか崩落したものなのか実際区別できない場合もあり、層序に関して多少無理が生じた部分もでこった。

羨道については、側壁のみならずその痕跡さえものこっていなかったため、全体にかたくしまった裏込めの小礫層や墳丘盛土層を目安にしながら、玄室側から床面を追って埋積土をとりのぞいていった。壁の部分に関しては、明瞭な境があったわけではないが、小礫が多くかたくしまっており、移植ごてを突きたてなければ掘りすすめなくなった時点で掘りのこした。また、併行して前庭の石組みを露出させ、羨門の位置と規模を確定する作業をおこなった。

前庭の残存する石組みからみるなら、検出した羨門の位置が大きく変わることは考えにくいが、後述するように前庭東袖垣の石組みがかなり崩れているため、東側壁側がひろがり、羨道がいくらか幅広になることもあると考えられる。また、前庭に後代手がくわわっていたり、前庭自体石室とは別個につくられていたりする可能性もないとはいえないのであろうが、この点については判断材料を欠いている。

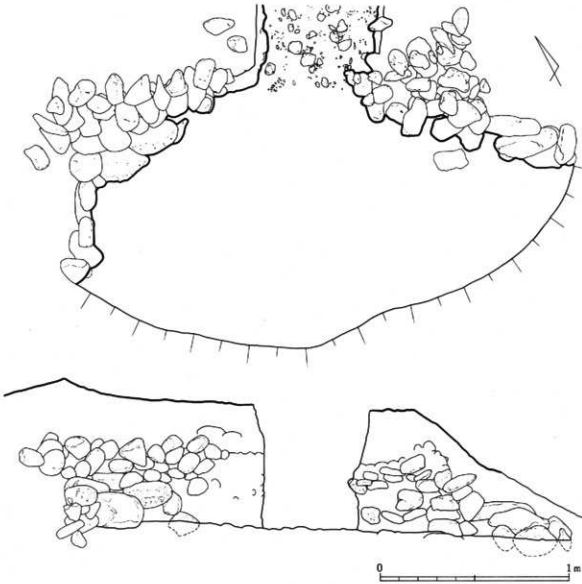
d．前庭の残存状態と諸特徴

前庭は、袖垣および西翼垣の一部のみ遺存する。袖垣が一線をなさず羨門にむかってややすぼまる形態である。いずれも推定値になるが、翼垣末端での幅が2.5m前後、奥行きが１m前後である。最ものこりのよい西袖垣の高さは、40～45cmである。

西袖垣は比較的のこりがよく、拳大の礫を交互につみあげて、やや傾斜のある石垣を造作している。最下段の２個の大礫は角閃石安山岩である。羨門付近は、石組みが欠けている。翼垣は、１、２段しかのこらず、礫も大小ある。

東袖垣はかなりくずれており、また礫の欠落もいちじるしい。比較的密着している礫のみのこしたが、のこした礫をおおってかなりの数のういた礫があり、あるいは袖垣から墳丘中腹につながる２段目の石列の一部がくずれた状態でのこっていたのかもしれない。東端最下段の縦長の礫は、根石のように埋めこまれている。

硬くしまった117層上面を、前庭床面と考えたが、118・120層上面もかなりしまっており、床面とみることもできる。いずれの面にも、角閃石安山岩の細かな砕片、粉末が散ってい



第11図　前庭平面図および立面図

る。117層上面は、ほぼ中央が盛りあがるように高まり、全体に棺床面や羨道床面より高くなっている。118・120層上面は、羨道床面よりわずかに低い。羨道、前庭には、玄室と異なり、棺床面下の掘り方に相当する部分がみられない。

e．石室および前庭の遺物出土状態

棺床面および前庭床面からは、遺物がほとんど出土していない。鎧かと思われる環状の鉄製品の破片が1点玄門近くの羨道で(図版6、右下)、耳環が1点奥壁寄りの東側壁近くで出土している(第12図1、図版6、右下)。前者は6層上面、後者は5層中である。小型の耳環(第12図2)は、東側壁中央に接する位置で採取した5層土をふるうことでえられたものである。いずれも盗掘による攪乱層にまぎれた遺物と考えられる。

奥壁側棺床面下を精査するためにいれたサブトレンチから、土師器坏類の破片が出土している(第13図1)。旧表土の黒褐色土中から出土したものではあるが、棺床面下の旧表土に砕石が混入する箇所を確認しており、石室基礎面の造作などにかかわる資料である可能性

もないではない。

前庭からは、古墳時代後期以降の土師器坏類の細片がわずかに出土したのみで、新しい時期の遺物は一切出土していない。

(4) 周　堀

a．検出状況

墳丘調査の最終段階に併行して、南側の畑地に墳丘中心にむかう3本のトレンチを設定し、周堀の確認調査をおこなった。まず、小型重機で表土層を除去し、周堀の輪郭をとらえた段階で、各トレンチの東・北東壁にそってサブ・トレンチを設定し、人力で開掘し断面図および平面図を作成した。3本のトレンチは、西からトレンチ1～3と呼称した(第4・7・8図)。3つのトレンチにより確認した周堀は墳丘をとりまきほぼ円弧を描くが、トレンチ3では、時期の新しい土坑に周堀外縁がこわされていることもあり、多少ゆがんだ形状となる。

b．形態と規模

周堀内縁から推定した墳丘全径は、18.9m、外縁からは全径27.5mの円墳に復元できる。この場合、墳丘の中心は、玄室中央よりかなり手前西寄りの位置となるため、あくまでも暫定的な一案と考える（第4図)。

周堀の断面形は、ゆるやかな弧状を呈し、凹凸がいちじるしい。トレンチ1・2では、堀幅3.98～4.11m前後、深さは約60cm、トレンチ3での堀幅は、3.4m、深さはやはり60cm前後である。底面はかなり不明瞭であり、底幅も76～116cmと広狭がある。

c．覆土の堆積状態

周堀覆土の堆積状態は、多少土層の乱れが目だつものの、基本的に内側と外側からの暗褐色土、あるいは黒褐色土の流入として理解できる（第7・8図)。13層は古墳周堀に通有の古墳時代旧表土の黒褐色土が流入した層であり、暗褐色土とした土層は、ローム層上の暗褐色土に、その黒褐色土やローム粒が混入した土を主とするものである。なお、出土遺物に関しては、覆土上層を中心に、古墳時代後期に属するかと思われる土師器坏細片が少数出土しているのみである。

2　出土遺物

(1) 古墳時代の遺物

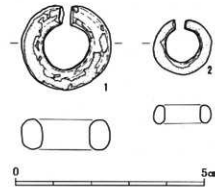
御堂坂第1号墳出土の古墳時代の遺物としては、耳環や土師器、須恵器などの土器類、埴輪があるが、前庭床面や周堀覆土からごく少量の微細な土師器片が出土している以外には、古墳に明確にともなう遺物はみられない。以下、遺物自体の区別により記載をおこない、出土位置や出土層位が問題になる資料についてのみその旨付言することにしたい。

a．耳　環

第12図1は、鉄地金銅張りで、外径2.4×2.25cm、内径1.33×1.2cm、厚さは0.8cmをはか

る。装着部や側縁の一部に緑青がうきでており、また地金が所々露出しているが、銹化はそれほどすすんでいない。

2も鉄地金銅張りである。外径1.5×1.37㎝、内径0.9×0.85㎝、厚さは0.5㎝をはかる。銹化がすすみ外面全体に緑青がうきでている。外面の鍍金はほとんど銹化、剝落しており、所々緑青のすきまに黒ずんだ地金がすかしみえる。



第12図　耳環実測図

b．土　器

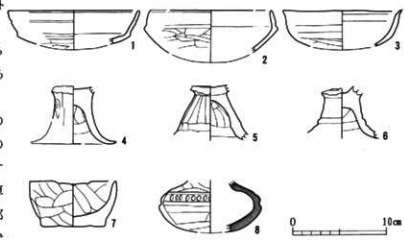
第13図1～7には古墳時代後期の土師器、同図8には須恵器をしめしたが、第13図1以外は、いずれも表土層や攪乱層より出土した資料である。図化可能な資料は、ほぼ第13図につきる。時期的に問題となる資料である、第13図1～3の坏、8の須恵器甕から記載する。

第13図1（図版6、右下端）は、奥壁外の墳丘下の黒褐色土中から出土した有段口縁坏である。口縁部から底部にかけて1/7～1/6前後遺存する。推定で口径13.8㎝、器高4.1㎝である。端部は丸みを帯び、口縁部の内外面はヨコナデされている。外面の中位と突出する稜にそって凹線状の調整痕がみられる。底部内面はナデ、外面はヘラケズリである。内外面ともに黒色処理されている。にぶい赤褐色を呈し、細砂を含むも堅緻な土器である。同じ黒褐色土層から同一個体の底部片が他に1点出土している。

2は須恵器坏身模倣の内屈口縁坏で、口縁部から底部にかけて1/6前後遺存する。推定で口径13.0㎝、器高5.5㎝である。口縁部外面および内面はヨコナデ、底部外面はヘラケズリである。底部内外面の一部および口縁部の内外面は、黒色処理されているが、むらが多い。胎土、焼成ともに1とよく似ている。

3は端部が短く外屈し、以下丸みをもって底面にいたる形態の坏である。口縁部から底部にかけて1/7前後遺存する。推定で口径12.6㎝、器高4.2㎝である。端部内面には強いヨコナデにより段がみられ、外面中位にも調整痕の一種と思われる微段がみとめられる。内面はヨコナデ、底部外面はヘラケズリされている。端部および底面付近は、極端に器厚がうすくなる。底部外面以外は、黒色処理されている。橙色を呈し、1・2にくらべ軟質の焼きの土器である。

8は類の長い須恵器甕の胴部片であろうか。胴部のみ1/6～1/5前後遺存する。偏球状の器形で、器厚は8㎜前後とぶ厚い。胴部最大径は、推定で10.9㎝で



第13図　土器実測図

ある。外面胴部上位は自然釉により部分的に光沢があり、胴部下位には不ぞろいなケズリに近い成形痕あるいは整形痕がみとめられる。胴部最大径部位には、凹線および櫛歯状工具による刺突がほどこされているが、刺突内の条は不明瞭である。焼きがあまく、灰色軟質である。

破片資料であり細かな位置づけはできないが、1～3は、6世紀後半におさまるものと考えられる。8はTK 209型式の時期であろう。

第13図4～6は、裾ひろがりの低脚高坏の脚部片である。4・5は底が平らに近い坏部がつき、6は粗い内面調整のすぼまるような形の坏部がつくようである。5は脚部がふくらみ、下端で屈折し裾部がひらく形態である。4・6の外面には、タテナデがほどこされ、6の脚部下半には凹線状の調整痕がのこされている。5の外面はタテの強いケズリにより整形されており、屈折部付近にはヨコナデがくわえられている。4の内外面は赤彩、6の外面もかなり赤みをおびるが、発色が悪く化粧がけの一種ともみえる。いずれも橙色を呈し砂粒を含み、5はとくに角閃石や黒みの強い岩片が目だつ。1～3の坏に先行する時期の高坏であろうか。

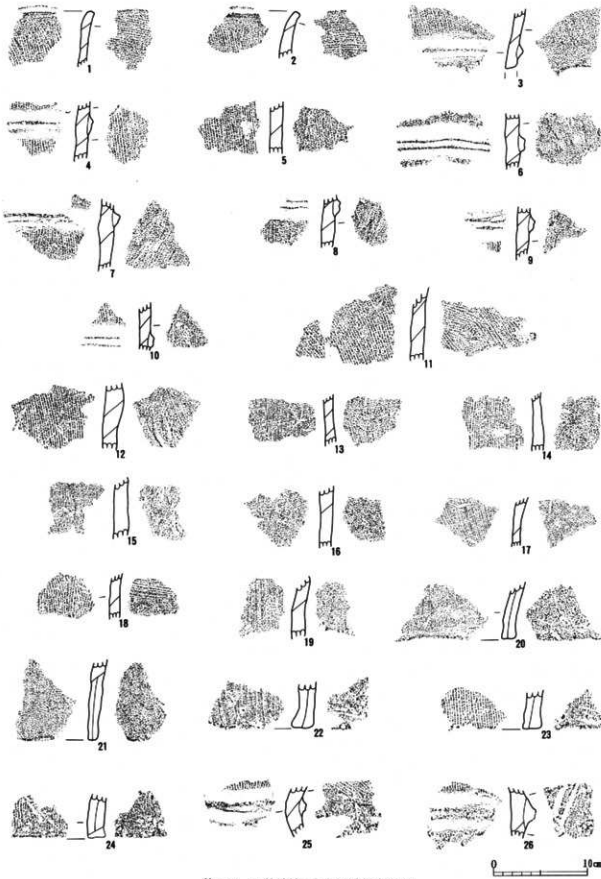
7は手づくね土器、形態的には鉢の一種である。口縁部の過半を欠く以外はほぼ遺存する。口径9.2cm、底径6.8cm、器高4.9cmである。内外面ともに指頭による成形、整形痕をとどめ、凹凸がいちじるしい。底面はヘラケズリである。大小砂粒をかなり含み、橙色を呈する。焼成、胎土などからごく感覚的に古墳時代後期以前の土器にみえるが、より強い根拠をしめすことができない。

c．埴　輪

埴輪はすべて墳丘表土から検出した。いずれも細片で、原位置を保つものは皆無であり、また周堀覆土中への転落も認めないことから、ことごとくが周辺古墳からの混入と認識している。器種は円筒埴輪に加え、少量の朝顔形埴輪、形象埴輪を認める。形象埴輪のうちには、家、馬を確認できる。

第14図に円筒埴輪、朝顔形埴輪の拓影を示す。円筒埴輪は、全形の知れる資料が存在しないものの、残存部位の彎曲度から大口径の個体は含まず、すべて二条突帯三段構成品の破片と認定しうる。成形は輪積ないし粘土紐巻き上げにより、基部は多くが粘土板2枚合せの成形手法を採る。焼成はおおむね良好で、多くが橙色ないしにぶい橙色を呈する。14は須恵質焼成による唯一の個体で、色調は黒褐色を示す。なお、図化していないが、小片のうちには、軟質焼成で暗赤褐色を呈する個体が存在する。外面調整はすべて1次タテハケによる。基部片が複数点存在するが、いずれにも底部調整を認めない。内面調整は、タテおよびナナメ方向のハケ、ナデである。突帯は、断面が台形ないし崩れたM字形を呈し、突出度の高い個体はない。確認できる透孔はすべて円形である。なお、11は円筒埴輪としたが、やや口径が大きく、朝顔形埴輪の口縁部の可能性を残す。

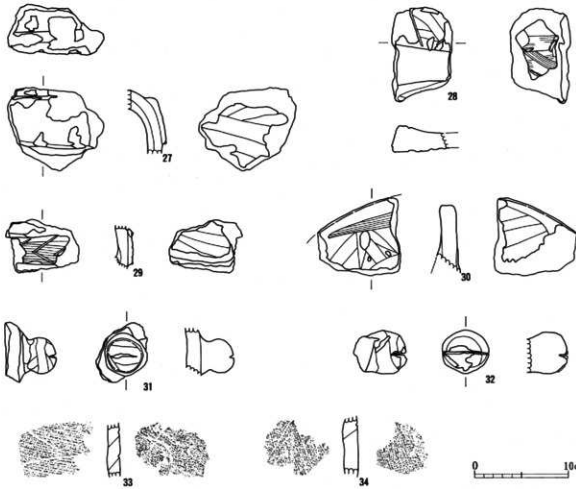
朝顔形埴輪は25・26の2点を確認できる。ともに焼成良好で、色調は橙色を呈する。25は頸部にあたり、調整は外面に1次タテハケ、内面にナナメハケおよびナナメナデを認め、突帯を巡らす。26は胴部から肩部にかけての部位で、調整は外面に1次タテハケ、内面にナナメハケを観察する。



第14図　円筒埴輪・朝顔形埴輪実測図

第1表　埴輪観察表(1)

番号	器種	部位	調整・成形・形態の特徴	焼成	色調	備考
1	円筒	第3段	外面-1次タテハケ(9本/2cm)。 内面-ナナメハケ(9本/2cm)・ナナメナデ。口唇部ヨコナデ。	良好	によい橙色	
2	円筒	第3段	外面-1次タテハケ(8本/2cm) 内面-ヨコハケ(8本/2cm)・ナナメハケ。口唇部ヨコナデ。	良好	によい橙色	
3	円筒	第2・3段	外面-1次タテハケ(8本/2cm)。 内面-ナナメナデ。突帯ヨコナデ。円形透孔。	良好	によい橙色	
4	円筒	第1・2段	外面-1次タテハケ(8本/2cm)。 内面-ナナメハケ(8本/2cm)。突帯ヨコナデ。円形透孔。	良好	によい橙色	
5	円筒	第2段	外面-1次タテハケ(8本/2cm。 内面-タテハケ(8本/2cm)・タテナデ。円形透孔。	良好	によい橙色	
6	円筒	第1・2段	外面-1次タテハケ(15本/2cm)。 内面-ナナメナデ。突帯ヨコナデ。	良好	橙色	
7	円筒	第1・2段	外面-1次タテハケ(8本/2cm)。 内面-ナナメハケ(7本/2cm)・ナナメナデ。突帯ヨコナデ。	良好	によい黄橙色	
8	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(20本/2cm)。 内面-タテナデ。突帯ヨコナデ。	良好	橙色	
9	円筒	第2段	外面-1次タテハケ(18本/2cm)。 内面-タテナデ。突帯ヨコナデ。	良好	によい赤褐色	
10	円筒	第2段	外面-1次タテハケ(8本/2cm)。 内面-タテナデ。突帯ヨコナデ。	良好	によい橙色	
11	円筒	第3段	外面-1次タテハケ(8本/2cm)。 内面-ヨコハケ(8本/2cm)・ナナメハケ。	良好	橙色	朝顔形の可能性あり。
12	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(8本/2cm)。 内面-ナナメハケ(10本/2cm)・ナナメナデ。	良好	橙色	
13	円筒	第2段	外面-1次タテハケ(12本/2cm)。 内面-ナナメハケ(12本/2cm)・ナナメナデ。	良好	橙色	
14	円筒	第2段	外面-1次タテハケ(11本/2cm)。 内面-ナナメハケ(11本/2cm)・ナナメナデ。	須恵質	黒褐色	
15	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(14本/2cm)。 内面-ナナメナデ。	良好	によい橙色	
16	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(14本/2cm)。 内面-ナナメナデ。	良好	橙色	
17	円筒	第3段	外面-1次タテハケ(16本/2cm)。 内面-ヨコハケ(15本/2cm)・ナナメハケ。	良好	橙色	
18	円筒	第3段	外面-1次タテハケ(8本/2cm)。 内面-ナナメハケ(8本/2cm)。	良好	橙色	
19	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(16本/2cm)。 内面-タテナデ。突帯ヨコナデ。	良好	橙色	
20	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(11本/2cm)。 内面-ナナメナデ。	良好	によい橙色	
21	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(13本/2cm)。 内面-ナナメナデ。	良好	橙色	
22	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(14本/2cm)。 内面-ナナメナデ。	良好	橙色	
23	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(7本/2cm)。 内面-タテハケ(7本/2cm)・ナナメハケ。	良好	によい橙色	
24	円筒	第1段	外面-1次タテハケ(7本/2cm)。 内面-タテハケ(8本/2cm)・ナナメナデ。	良好	によい橙色	
25	朝顔	類部	外面-1次タテハケ(8本/2cm)。 内面-ナナメハケ(8本/2cm)・ナナメナデ。突帯ヨコナデ。	良好	橙色	
26	朝顔	頸・胴部	外面-1次タテハケ(7本/2cm)。 内面-ナナメハケ(7本/2cm)。突帯ヨコナデ。	良好	橙色	器面摩耗。



第15図　形象埴輪実測図

第２表　埴輪観察表(2)

番号	器種	部位	調整・成形・形態の特徴	焼成	色調	備考
27	家	屋根	屋根上端部から棟部。棟覆を幅広の粘土帯で表現。棟部上面に竪魚木の剥離痕。外面-ハケおよびナデ。内面-不定方向のナデ。	良好	橙色	
28	家	屋根	入母屋式屋根の下端部。下辺の突帯剥離。屋根表面に線刻による三角文を表現。内外面-不定方向のハケおよびナデ。	良好	橙色	
29	馬	頭部	右側頭の下端部。面繋の頬革と手綱を表現。面繋には線刻で鈹杉状の装飾を表す。外面-ハケおよびナデ。内面-ナデ。	良好	橙色	
30	馬	鞍橋	前輪、後輪の別不明。繋の表現なし。端部-ヨコナデ。 前後面-不定方向のハケおよびナデ。	良好	橙色	
31	馬	鈴	胸繋ないし尻繋に付く鈴。ヘラ状工具による切開で鈴口を表現。中実成形。外面-全面不定方向のナデ。体部内面-ナデ。	良好	橙色	
32	馬	鈴	胸繋ないし尻繋に付く鈴。ヘラ状工具による切開で鈴口を表現。中実成形。外面-全面不定方向のナデ。	良好	橙色	
33	不明	-	板状を呈し、表面に２条の線刻が入る。盾ないし靫背負板の一部か。表面-ナナメハケ。裏面-不定方向のハケおよびナデ。	良好	橙色	器面摩耗。
34	不明	-	板状を呈し、表面に１条の線刻が入る。盾ないし靫背負板の一部か。表面-タテハケ。裏面-不定方向のハケ。	良好	橙色	

第15図に形象埴輪の実測図ならびに拓影を示す。いずれも焼成良好で、色調は橙色を呈する。27・28は家で、ともに屋根の一部である。27は屋根上端から棟にかけての部位に該当し、棟覆を幅広の粘土帯で表現する。棟部上面に堅魚木の剝離痕を認める。調整は、外面がハケおよびナデ、内面が不定方向のナデである。28は入母屋式屋根の下端部にあたり、側方に壁体部からの剝離面を認める。下辺に貼付されていた粘土帯は剝離している。屋根表面に線刻による三角文を表現する。調整は、内外面一不定方向のハケおよびナデである。

29～32は馬である。29は右側頭の下端部で、面繋の頬革と手綱を表現する。面繋には線刻により綾杉状の装飾を表す。調整は、外面がハケおよびナデ、内面がナデである。30は鞍橋の一部と考えるが、繋の表現はなく、前輪、後輪の別も不明である。調整は、前後面に不定方向のハケおよびナデを施したのち、端部にヨコナデを加える。31・32は、胸繋ないし尻繋に貼付される鈴で、ともに中実成形により、表面は全面不定方向のナデを施し、ヘラ状工具による切開で鈴口を表現する。32は体部ごと破断し、体部内面調整にはナデを認める。

33・34は器種不明である。ともに板状を呈し、表面に線刻が入る。盾ないし靫背負板の一部の可能性が考えられる。調整は、33の表面がナナメハケ、裏面が不定方向のハケおよびナデ、34の表面がタテハケ、裏面が不定方向のハケである。

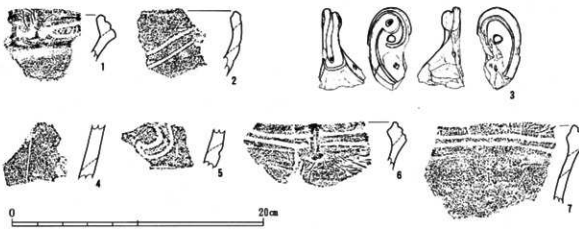
(2) その他の遺物

今回の調査では、上記した古墳時代の遺物のほかに、表土や盗掘坑内、1号溝覆土、墳丘盛土などから少数の縄文時代の土器、石器、および陶磁器片などが出土している。以下、縄文時代の土器、石器にかぎって記載することにしたい。

a．縄文土器

第16図1～5は、後期初頭・前葉の土器で、いずれも表土や墳丘盛土から出土した資料である。

1・2は口縁部片である。1は口縁部下端からつよく内折する形態で、口縁部外面には未貫通の円孔が4個うがたれ、沈線がほどこされている。左半中央2個の円孔は沈線で連



第16図　縄文土器実測図

結され、両側の円孔の周囲はつよく粘土が隆起している。右端の円孔は沈線による区画の一端をなすらしく、区画内には、刻みのある工具で斜めの刺突、ないしは無節縄文がくわえられている。橙色を呈し、やや軟質である。2は内彎気味にたちあがる椀のような器形になろうか。外面には斜めの平行する沈線がほどこされ、擦痕様の調整痕をとどめる。にぶい褐色を呈し、比較的硬質であるが、砂粒が目だつ。

3は大きく波状をなし突きでた把手であろう。図左から外面、右側面、内面、左側面となる。把手隆起部の中央に円孔がうがたれ、左側面には沈線、右側面には未貫通孔および沈線がほどこされている。外面の未貫通孔を起点に、隆起部のへり沿いにほどこされた沈線は、右側面におよび、円孔をまいている。右側面の口縁部近くに斜め下方から浅い刺突が1つくわえられているが、列点の一部であろう。砂粒をやや含むも、灰白色の精良な胎土である。

4・5は胴部片である。4は直線のみ、5には平行する沈線でえがかれた曲線文の一部がみとめられる。5の外面には、2と同様の調整痕が顕著である。ともににぶい橙色を呈する。

1・2・5は堀之内1式、3・4はややさかのぼる可能性ものころうか。

6は墳丘中、7は棺床面下の黒褐色土から出土した。同一個体片であろう。口縁部下端から内折し肥厚する形態である。端部内面はなでつけられている。外面には縦長の貼付文がはりつけられ、平行する2本の太い沈線あるいは凹線がほどこされている。粘土帯にも縦の沈線がくわえられている。磨耗、剝落がいちじるしくわかりにくいが、部分的に矢羽根状をなすかにみえる粗い擦痕がみとめられる。にぶい橙色を呈し、砂粒を多量に含むも、焼成は良好である。後期後葉の高井東式に類する土器であろう。

b．石　器

図化していないが、表土から打製石斧片、礫器が1点ずつ出土している。打製石斧は撥型で基部を大きく欠き、礫器は一側縁に自然面をのこし、片側に刃部らしきものをつくりだした製品である。上記した縄文土器のいずれかの時期に属するものであろう。

V まとめ

今回の調査では、墳丘および石室の残存状態を確認することが第1の課題であった。また残存状態から本来の古墳の形状を推定するためにどのような情報をえることができるのか、ということが第2の課題となった。

発掘調査に着手してみると、第1号墳の残存状態は思いのほか悪く、壁材をほとんど略取された石室内は、裏込めの砂礫や崩落土、攪乱された土にみたされているような状態で、残存部分を手探りでさがしもとめる作業をくりかえすしかなかった。残存部分を精査したが、棺床面下の精査が一部にとどまったこと、羨道や前庭の断面観察がやはり部分的であったことなど、なお調査時点での問題点、積みのこした課題も多い。

以下、第1号墳の位置づけにかかわる問題点を列記し、まとめにかえることにしたい。

まず、第1号墳の位置づけを考える場合、すでに調査のおこなわれた御堂坂第2・4号墳との関係がひとつの手がかりとなる。

第4号墳は埴輪をともなう古墳であることが確認されており、埴輪をともなわない第1・2号墳に先行する。また、先にしるした復元案（第3図）からも御堂坂第1・4号墳は近接しすぎており、同時に築かれた古墳ではないことがみてとれる。

第1・2号墳は、奥壁が丸く胴がわずかに張る同じような石室形態と推定され、また石材が浮石質角閃石安山岩である共通点がある。しかし、第2号墳には、旧表土を掘りくぼめた明瞭な掘り方がみられること、棺床面の砕石層下に比較的大きな礫からなる敷石がみられ、敷石につらなり石垣をなす控え積みがあることなど相違点も少なくない。相違点は、いずれも第2号墳の石室の構築法にくらべ、第1号墳のそれが簡略であることをしめすが、この「簡略」さが何にもとづくのかは、早急に結論をくだすことができないようである。

石室形態、石材の種類からは、第1・2号墳がともに6世紀後半以降につくられたことがわかるが、ここで第2号墳を7世紀前半ごろに位置づける見方（増田　1990：あとがき）をとるなら、第1号墳の時間的な位置はかなり微妙なものとなる。

唯一間接的ながら第1号墳の時期をものがたる遺物は、石室下旧表土の黒褐色土から出土した土師器坏の破片資料である。6世紀後半におさまる資料であり、上記した上限を追証する。古墳時代の出土遺物自体僅少であり、図化しえた資料はさらにかぎられるが、それらのなかには、7世紀初頭より下るものはみられない。第1号墳の下限の時期については、いわゆる「奥搾り形」の石室や前庭の形態、構築法などの地域的な推移をなお見きわめる必要があり、現段階では確定できない。

問題点を列記したのみであり、第1号墳の位置づけについて明確な結論をえることができなかったが、今後の研究の進展を期し、ひとまずまとめとしたい。

末筆ながら、発掘調査、報告書の作成にご協力いただいた様々な方々に、心から御礼申し上げる次第である。

引用文献および主要参考文献

磯崎　一　1995　『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第177集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
――――　1997　『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第191集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
太田博之・佐藤好司ほか　1991　『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ－公鼎塚古墳－』、本庄市埋蔵文化財調査報告第19集、本庄市教育委員会
小川良祐・長谷川　勇ほか　1978　『埼玉県本庄市御手長山古墳発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第１集、本庄市教育委員会
加部二生　1999　「横穴式石室の前庭について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集、国立歴史民俗博物館
群馬県古墳時代研究会編　1998　『群馬県内の横穴式石室Ⅰ（西毛編）』群馬県古墳時代研究会資料集第３集、群馬県古墳時代研究会
――――――――――　1999　『群馬県内の横穴式石室Ⅱ（東毛編）』群馬県古墳時代研究会資料集第４集、群馬県古墳時代研究会
――――――――――　2000　『群馬県内の横穴式石室Ⅲ（中毛編）』群馬県古墳時代研究会資料集第５集、群馬県古墳時代研究会
――――――――――　2001　『群馬県内の横穴式石室Ⅳ（補遺編）』群馬県古墳時代研究会資料集第６集、群馬県古墳時代研究会
埼玉県教育委員会　1956　「古墳調査報告　第１編－本庄市及び児玉郡古墳調査－」
佐藤好司　1988　「本庄市内発見の埴輪」『本庄市立歴史民俗資料館紀要』第２号、本庄市教育委員会
――――　1997　「旭・小島古墳群　開拓１号墳発掘調査報告書」本庄市遺跡調査会報告第２集、本庄市遺跡調査会
菅谷浩之ほか　1969　『本庄市塚合古墳調査報告書』本庄市教育委員会
――――ほか　1973　『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第19集、埼玉県遺跡調査会
――――ほか　1980　『長神古墳群』児玉町文化財調査報告書第１集、児玉町教育委員会
田中広明　1987　「終末期古墳の地域性」「土曜考古」第12号、土曜考古学研究会
――――　1989　「上毛野・北武蔵の土器生産－土器生産の転換と在地首長制－」「東国土器研究」第２号、東国土器研究会
――――　1991　「古墳時代後期の土器生産と集落への供給」「埼玉考古学論集」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田村　誠　1996　『青柳古墳群　四軒在家支群』神川町教育委員会文化財調査報告第13集、神川町教育委員会
田村　誠・金子彰男　1997　『青柳古墳群　城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支群』神川町教育委員会文化財調査報告第16集、神川町教育委員会
利根川章彦　1982　「古墳時代集落構成の一考察」「土曜考古」第５号、土曜考古学会
――――　1994　「東国の群集墳」「古代を考える　東国と大和王権」吉川弘文館
本庄市教育委員会　1957　『郷土のあゆみ－本庄市の歴史－』
本庄市史編集室編　1976　『本庄市史　資料編』本庄市
――――　1986　『本庄市史　通史編Ⅰ』本庄市
――――　1989　『本庄市史　通史編Ⅱ』本庄市
増田逸郎　1977　「北武蔵における横穴式石室の変遷」「信濃」第29巻第７号、信濃史学会
増田一裕　1985　『本庄遺跡群発掘調査報告書－久下東遺跡・遺構編－』本庄市埋蔵文化財調査報告第７集、本庄市教育委員会
――――　1987ａ　『本庄住宅団地内遺跡群発調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第11集、本庄市教育委員会
――――　1987ｂ　『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第９集、本庄市教育委員会
――――　1987ｃ　『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集、本庄市教育委員会
――――　1989ａ　『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
――――　1989ｂ　『旭・小島古墳群Ⅱ－株式会社山本製作所本庄工場内に所在する埋蔵文化財調査報告書－』本庄市埋蔵文化財調査報告第13集、本庄市教育委員会
――――　1989ｃ　『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』本庄市埋蔵文化財調査報告第９集第２分冊、本庄市教育委員会
――――　1990　「本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅳ－御堂坂第２号墳の調査－」、本庄市埋蔵文化財調査報告第16集、本庄市教育委員会
茂木由行　1984　「群馬県における鬼高式土器の編年」「群馬考古学手帳」第９号、群馬考古学談話会
森田安彦・永井智教ほか　1999　「塩古墳群・狐塚27号墳発掘調査報告書」江南町埋蔵文化財調査報告書第12集、埼玉県大里郡江南町教育委員会

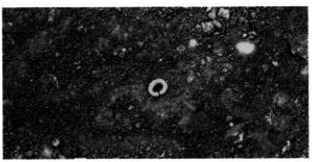
図　版

調査前近景（南西より）

表土下墳丘確認状況（南より）

墳丘残存状態（南西より）

石室確認状況（南西より）



耳環出土状態（南西より）

鉄製品出土状態（南より）

図版　2

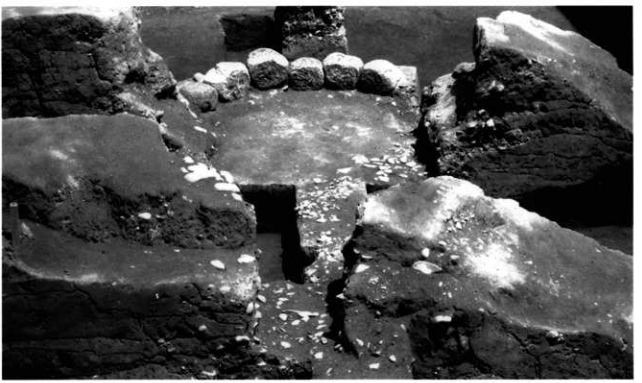
石室検出状態（南西より）

前庭検出状態（南西より）

玄室入口側および羨道（北東より）

玄室奥壁（南西より）

石室および墳丘精査状況（1）（南西より）



石室および墳丘精査状況（2）（南西より）

玄室奥壁遺存状態（1）（南西より）

玄室奥壁遺存状態（2）（北より）

北側墳丘および玄室土層断面（A－B）（北西より）

玄室奥壁根石遺存状態（北より）

玄室奥壁付近土層断面（A－B）（北西より）

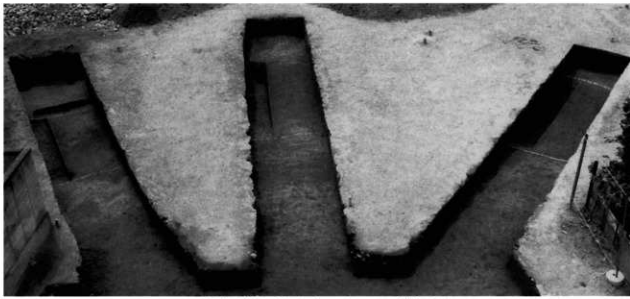
東西土層断面（D－E）（南西より）

東西土層断面（H－I）（南西より）

東西土層断面西側（D－E）（南西より）

東西土層断面西側（F－G）（北東より）

調査範囲完掘状況（南より）



周堀確認状況（右からトレンチ１～３、北東より）

トレンチ１土層断面（Ｊ－Ｋ）（北西より）

トレンチ２土層断面（Ｂ－Ｃ）（北西より）

トレンチ３土層断面（Ｌ－Ｍ）（西より）

耳環

石室下旧表土出土土器

報告書抄録

ふ り が な	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	市内遺跡発掘調査報告書
副 書 名	御堂坂第１号墳の調査
シ リ ー ズ	本庄市埋蔵文化財発掘調査報告　第24集
執筆・編集者	松本　完・太田　博之
編 集 機 関	本庄市教育委員会
所　在　地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３－５－３本庄市役所内　TEL 0495-25-1186
発 行 年 月 日	2002（平成14）年３月29日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号	″″	″″			
御堂坂第１号墳	埼玉県本庄市日の出３丁目５番3742－２番地の一部	112119	53-163	36′13′58″	139′12′22″	2000.07.03 2000.08.30	180	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特記事項
御堂坂第１号墳	古墳址	古墳時代後期	円墳址１基 横穴式石室 周堀	土師器、須恵器、埴輪、耳環、鉄器	横穴式石室の基底部、前庭部を確認
	散布地	縄文		縄文土器、石器	

本庄市埋蔵文化財調査報告　第24集

市内遺跡発掘調査報告書

―御堂坂第１号墳の調査―

平成14年３月25日　印刷
平成14年３月29日　発行

発行　本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄３-５-３
印刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67